中東問題に対する統一思想の役割

ブリッジポート大学国際学部長　トーマス・ウォード

問題理解のために・・・中東の現在の課題

現代の中東問題はそもそも、第一次世界大戦後の列強による権益分配に端を発する。第二に、文鮮明師の洞察によれば、第二次世界大戦が終わった後に、米国とキリスト教界が神の摂理に適切に応じなかったことと関係している。そして第三には、冷戦後の西側世界が選んだ針路に影響を受けた。

アフガニスタンを包囲していたソ連軍は１９８９年に撤退したが、その後、米国もアフガニスタンを放棄し、米・アフガン連帯は挫折した。それによって、米・アラブ関係も悪化した。アフガニスタンでソ連軍と闘ったムジャヘディンは、地元のアフガン人に加え、世界中から集まったムスリム義勇兵で編成され、米国の戦略目標であるソ連のアフガン撤退までは、米国からスティンガー・ミサイル等の戦略物資を供与された。

しかしソ連が撤退するやいなや米国が舞台を降りたため、アルカイダのウサマ・ビンラディンが喝破したように、イスラム世界にとって米国は束の間の同盟に過ぎない、という見方を裏書きした形になってしまった。

もっともアルカイダのアメリカ観は、止めどのない精神的堕落と、紋切り型のイスラエル支持に固執する限り、米国はイスラムの究極的な敵だというものだ。彼らの怒りと侮蔑の深さを顕在化させたのが、２００１年、アルカイダの支援を受けたニューヨーク・ワシントンでの同時多発テロ事件だ。この事件を中東専門家は、次のような米国の外交・国内政策への反撃と分析した。

① イスラム一番の聖域があるサウジアラビアの首都リアド等に、米軍が駐屯した。
② 米国の中東外交は、不公平で一方的なものだ。国連安全保障理事会でも、米国はイスラエルを頑固なほど一貫して支持を与えてきた。
③ 民主的選挙を実施しても、イスラム勢力が権力を握ることになれば、パレスチナやアルジェリア、パキスタンで見られたように、米国はその政権を認めたがらない。
④ 西側社会が進歩の基本とみなす政教分離の原則は、シャリア（イスラム法）に立脚したイスラム政治理論と矛盾する。

これらのうちアラブ世界に一番悩ましいのは、米国がイスラエルに偏したような外交・経済・軍事・政治上の支援を与えている。例えば１９７２―２０００年に国連安全保障理事会で採決された対イスラエル関連決議に際し、米国は四十回以上も拒否権を行使した。その三分の二以上の場合、反対票を投じたのは米国のみで、換言すれば、全会一致で採択されたは

ずの場面だった。

断っておくが、筆者は米国の拒否権行使そのものを非難しているわけではない。率直に言って、これらの国連決議には噴飯ものもある。例えば国連総会決議第３３７９号（１９７５．１１．１０）は、「シオニズムは人種差別の一形態だ」と断定し、賛成７２カ国，反対３５カ国、棄権３５カ国で採択され、１９９１年まで有効だった。

米国は国連安保理事会に上程される対イスラエル決議に抵抗する唯一の大国で、国連総会での投票もイスラエル寄りで一貫してきた。しかし全ての拒否権行使が妥当を正当化できる唯一の根拠は、国連総会や安保理事会の決議でイスラエルを糾弾すれば、同国に向けられる政治、経済、軍事的な報復が正当化され、結果として国の安定と生存を危険に曝すという理屈だ。

もっともイスラエルは米国から数十年間支援を受けてきたおかげで、周辺のアラブ諸国に圧倒的な軍事的優位を保っている。ちなみに第二次大戦直後のイスラエルに兵器を供給したのは、主に東欧諸国だった。イラクとアフガニスタン向けを除けば、米国の対外援助の三分の一がイスラエルとエジプトに供与されている。エジプトが米国から莫大な援助を受けるようになったのは、アンワル・サダト大統領（故人）がアラブ諸国との紐帯を破ってイスラエルと関係正常化してからだ。

揺らぎないような米国のイスラエル政策だが、冷戦中は地政学上の妥当性が確固たるものだった。当時のソ連は、中東の民族解放・アラブ民族主義運動を、理念・軍事・経済面で支援していたので、ソ連の影響が強い地域で、イスラエルは米戦略の軸足のような国だったからだ。米国の戦略家達は、親ソ地域からの脅威を抑止する上でも、イスラエルとの絆を活用することが米国の国益だと主張してきた。

だが東欧で共産圏が崩壊した今、イスラエルを冷戦下での中東における同盟国と位置づける必要はなくなった。だから現在も米国がイスラエル支援を続ける背景には、むしろ長年築かれた連帯感が大きく作用しているようだ。

「二国家」併存政策

現在、イスラエル、米国ともに過渡期を迎えている。一つの理由は、ユダヤ国家とアラブ国家の二つの国を併存させる案が、多くの障害にも関わらず支持を広げ、イスラエルとパレスチナは別々の独立国家になるとの見方が大勢を占めつつあることだ。米、イスラエル、パレスチナが目下想定している二国家方式とは、現在のイスラエルがユダヤ国家として存続し、別にパレスチナ国家を創設するというものだ。

簡単に歴史を振り返ってみよう。中東にユダヤ人国家を、という長年の訴えが外交の俎上に乗るきっかけを作ったのは、１９世紀後半にシオニズムの指導者セオドア・ヘルツェルが活発に行った著作や政治活動だ。パレスチナには、西暦７０年にエルサレムがローマ帝国に滅ぼされた後も少数のユダヤ人が残存していたが、ヘルツェルのアピールに触発され、東欧から数千人規模でユダヤ人がパレスチナに移住を始め、土地を買って定着し出した。

当時のドイツやオーストリア・ハンガリー、ロシアなどでユダヤ人虐待が問題になっており、西欧列強はユダヤ民族郷土の必要性を認識し始めていた。英国のバルフォア外相は１９１７年、ユダヤ民族郷土として、オスマントルコ帝国の領土からパレスチナ分割することを要請した。この「バルフォア宣言」では、新設のユダヤ国家がパレスチナ先住民を苦しめたり、権利侵害をしないよう念を押していた。

二十世紀初頭に同宣言が示した人道的な指針から見ても、ユダヤ・パレスチナ両民族の国を造るという提案は、意義深いものだった。なぜなら第一次世界大戦で敗北・解体したオスマントルコ帝国の「真空を埋める」ため、英仏両国は中東の信託統治を自任していた。そして部族長が実効支配していたような地域に、本格的な国家建設を進めていた。従って旧オスマントルコ帝国から、「ユダヤ国家」に一定の領土を割譲するのは妥当なことに思えた。フランスは「キリスト教国家」（レバノン）の創設まで言い出した。この二国家案を批判する者には、ユダヤ国家に想定された土地にほとんど住民がいないから問題はない、と説明した。（この点は今日まで論議のあるところだ。）

国連憲章が１９４５年１０月に採択され国連が出発して間もなく、ユダヤ国家建設派はロビー活動を始めた。彼らを勇気づけたのは、イスラエル新国家を強く支持するトルーマン米大統領だった。実際に米国は１９４７年１１月の国連総会で、バルフォア宣言が「パレスチナ」と規定した地域に、二国家を造るとする決議第１８１号の採択に主導的な役割を果たした。

この国連総会決議第１８１号は、旧パレスチナ（イスラエルとトランスヨルダン）から、ユダヤ国家とアラブ国家を造ることを謳ったので、ユダヤ国家の支持勢力は高く評価した。しかしアラブ側のトランスヨルダンに住むことになる人々に、そうした熱意はなかった。

「イスラムと平和」（２００６年）の著者の一人、ノア・サラメ氏は、この国連決議の問題点について、パレスチナ人のアイデンティティが否認されていたことを指摘し、その状態は未だに変更されていないと述べている。当時国連に加盟していたアラブ諸国は一カ国も同決議に賛成票を投じなかった。ちなみに二国家併存（イスラエルとトランスヨルダン）案に賛成したのは３３カ国、反対が１３カ国、棄権が１０カ国という具合に票が分かれた。

なおイスラエルの建国文書は、国の性格を「ユダヤ国家」と明記したが、関連文書の中で、当該地域に居住していたアラブ人には、一定の制限付きながら居住の継続と、イスラエル市民権の取得を可能にした。

二国家併存方式への反対論

今日、中東の主要プレーヤー達はイスラエル・パレスチナ両国家樹立の案を支持しており、「二国家併存方式」は、イスラエル政府とパレスチナ自治政府の公式の立場だ。もっともイスラエル指導者はパレスチナ国家の創設支持に一定の条件を付け、パレスチナ国家が、イスラエルを標的にした軍事作戦やテロ活動の拠点になることは拒否している。二国家方式はヨルダン、レバノン、エジプトでも公式の立場だ。この案で懸念されることの一つは、今のパレスチナが政治的に支配しているガザとヨルダン川西岸の二地域は飛び地になっていること

だ。

二国家方式に消極的なのは汎アラブ主義者やイスラム主義者だ。彼らの見るところイスラエル国家は、パレスチナ人民と、それを支援するアラブ諸国との軍事対決によってか、人口動態が原因で欧米のイスラエル支持が減っていくという形で、結果的に解体されるという。

また二国家方式の反対論には、そもそもイスラエル建国の経緯が不当ではないか、との疑問もある。主な反対論は次の四つだ。

① 国際法に準拠すれば１９４７年当時の国連は、過半数を確実に超える当該住民の意思に反してパレスチナを分割したり処理する権限を有していなかった。
② パレスチナの二国家分割を採択したのは国連総会であって、安保理事会ではなかった。総会決議は、国連加盟国に勧告をするものであって、如何なる強制力をも有しない。
③ 国連のパレスチナ分割案では、パレスチナの５５％の土地をユダヤ人に賦与することになっている。しかし当時のユダヤ住民は人口の３０％、土地所有の６－７％に過ぎなかった。また分割の時点で、パレスチナ市民権を保有していたのは、在住ユダヤ人の三分の一以下に満たなかった。
④ パレスチナ在住のアラブ人達が証言していることによれば、国連総会決議第１８１号が採決される段階で、大多数のパレスチナ人が住居を捨てざるを得なかった。シオニスト運動の地下軍事部門の「イルグン」から狙われる恐れがあったためだ。

他の政治的、宗教的理由からイスラエル建国に反対した有力政治家や組織の中には、エジプトのナセル大統領（１９１８－１９７０）、イラクのサッダム・フセイン大統領（１９３７－２００６）、イランのアハマッドネジャド大統領（１９５６－）や、最強硬派の組織としてハマス、アルカイダ、ヒズボラなどを挙げることができる。

イスラエル建国に反対するアラブ人は、いずれイスラエルに取って代わるアラブ主導のパレスチナ国家ができた時にユダヤ人も受け入れると主張する。だが、その新国家は「ユダヤ国家」ではあり得ないと断言する。このような政治環境に居続けるからユダヤ人は、常に危険に曝されているとイスラエル国民は訴える。

とりあえず米国のイスラエル支持は相変わらず強力だが、今後三十年間に親イスラエル政策の妥当性や、両者の信頼関係にヒビが入るかもしれない。なぜならインドや中国が石油需要の急増を背景に、中東でより中心的役割を演じる可能性があるからだ。

一方、パレスチナ人の人口急増や、欧米への移民増加といった人口動態の変化で、米国や欧州の選挙民が中東を見る見方も、数十年以内に変化していくだろう。そして無条件にイスラエルを支持してきた現在の政策に反発が広がるだろう。

現下のイスラエル・パレスチナ危機と二国家方式の見込みについて、元 PWPA 会長でシカゴ大学政治学部のモートン・カプラン名誉教授は最近の論文の中で、イスラエルとパレスチナの協力促進に関する建設的な政治的提言を行っている。それでも同教授は次のような警鐘を鳴らす。「想定される甚大な悲劇と絶望的な事態を避けるために、（イスラエル・パレスチ

ナ）双方の開明的な人々が提携し、さらに中東の知識人達と力を合わせるべきだ。」米国が調停役として強い力を発揮できる今のうちが、イスラエル・パレスチナ問題に平和的解決をもたらす好機だろう。

統一思想の中東での可能性

前述したような難局打開に、統一思想は何らかの指針を提供できるだろうか。人口動態と政治的なパワーバランスに変化が生じ出した今こそ、問題解決に向けて創造的に思索すべきだ。二、三十年の間に政治・経済の現実が変化し、米国が中東の二番手に後退すれば、緊張緩和や和平仲介能力も目に見えて減少する。既に述べた人口動態で政策転換を余儀なくされる前に、米国、イスラエル、パレスチナは新たな方策を検討すべきだ。

現在のイスラエル・パレスチナ問題を解決するために統一思想ができることは？

文鮮明師が設立した諸組織は過去四十年間、中東で様々なプロジェクトに関与した。世界平和教授アカデミー(PWPA)、ニューズワールド・コミュニケーションズ、天宙平和連合（UPF)、宗教青年奉仕プログラム、平和のための奉仕プログラム(SFP)等は、中東で十指を越える出版事業、学術会議、奉仕活動を実施してきた。

例えばPWPAは１９７０年代後半から、イスラエル・パレスチナ双方の人達によるシンポジウムを推進してきた。統一運動は１９６０年代半ばから現地に派遣員を送り活動してきた。またUPFは２００４年以降､イスラエル･パレスチナに三十三回の平和巡礼ツアーを実施し、数千人の宗教・女性運動の指導者を現地に案内した。文師の三男、文顕進博士は、一番最近の巡礼行事を率いている。

ところで中東平和を実現しようとする文鮮明師の活動には、如何なる思想的な基礎があるのか。

前例がある・・・冷戦終結に文鮮明師が果たした役割

中東での文鮮明師の業績を、我々は何故理解しなければならないのだろう。本論の筆者（Ｔ・ウォード）は、冷戦終結に文師が演じた重要な役割を目撃し、調査・執筆する機会に恵まれた一人だ。それは本稿の目的ではないが、文師はマルクス・レーニン主義思想を徹底的に吟味し、彼らの実践を追い続けてきた。そうした研究・調査に基づき、マルクス・レーニン主義が平等や正義を標榜しながら、実際には別の謝った方向に行く仕組みを究明した。そしてマルクス・レーニン主義の体系的批判と、文師の啓発に基づく対案を世界に普及するキャンペーンを展開した。

その成果として文師の祖国韓国では、１９５０年代に国際勝共連合（IFVOC）が創設され、マルクス・レーニン主義の批判と対案を韓国全土の選挙民に広め、政府や軍隊、学生達をも

啓蒙した。この活動は日本でも本格化し、米国、西欧、南米、アフリカ、ついには共産圏にも浸透していった。１９６０年代には共産圏にも統一運動の派遣員を送った。

また１９８０年代初頭から、世界言論人協会(WMA)や PWPA を通じて共産圏と直接交流を進め、１９９０年代には国際教育財団(IEF)や世界平和連合(WPF)が中核的な役割を担った。また１９８３年に文師が米国の首都に創刊した日刊紙「ワシントン・タイムズ」は、ソ連の拡張主義を暴露し、レーガン・ドクトリンと戦略防衛構想を支持する論陣を張った。この努力は米ソのパワーバランスを変えるのに大きな貢献を果たした。

そうした実績は政界、学会、宗教界で広く公的に認められ、賛辞を寄せた著名人の中には、サッチャー英首相、ゴルバチョフ・ソ連大統領、レーガン米国大統領、ジョージ・ブッシュ（父）大統領が含まれる。

文鮮明師の共産圏に対するアプローチは、マルクス主義思想とソビエトの軍事戦略に挑むだけではなかった。ソ連が成し遂げた多くの業績を尊重し、平和と和解を志向するものだった。そのため文師は１９７０年代後半から８０年代前半にかけ、自ら創設した PWPA、WMA や世界平和サミット会議などを通じ、共産圏に建設的な接触を試みた。

１９９０年に文師はゴルバチョフ大統領と会見し、ソ連政府と連携して様々なプロジェクトに着手した。例えば数百名のソ連国会議員を米国に招き、政界関係者と対話を促したり、米国産業界の実力者に会わせ、ソ連の各共和国に投資を奨励した。ソ連の数千名の若者を米国に連れてきて、米国文化と、その基盤になっているものを学んでもらった。

１９９１年に文師は、四十年以上も訪れることのなかった生まれ故郷の北朝鮮を訪問した。北朝鮮の金日成主席は、１９５０年代に文師を死刑囚の収容所に送った張本人だ。また１９８０代末期に北朝鮮は文師を標的として、日本赤軍の工作員菊村憂を米国に送った。菊村は８９年、ニュージャージー州の有料高速道路で逮捕され、当局は彼が武器を隠していた場所を見つけ出した。そこで発見された暗殺者リストには、文師も載っていた。菊村は今も連邦留置所で収監されている。

この事件の二年後に文師は金日成主席と会見し、「血は水よりも濃い」との言葉とともに和解をしたのだ。９１年の訪問以来、文師は北朝鮮との関係を継続し、一番新しいところでは、２００７年１０月、韓鶴子博士が主宰する世界平和女性連合から約七百名の女性が招かれ、北朝鮮との交流と対話を進めた。

イスラエル・パレスチナ問題に関する統一思想の思想的なアプローチ

本稿では統一思想から見て、中東問題の本質的な部分に心の葛藤があることを論じたい。この葛藤は、イスラエル・パレスチナ双方の長い歴史で引き起こされた誤ちや、蓄積してきた不満に根ざしている。そうした心の傷をまず理解する必要があり、そのために統一思想の歴史観が助けになるだろう。

統一思想から見た人間の起源と発展

統一思想は単源論（一元論）、つまり全人類は同一の起源に由来する、との考え方に立脚している。アダムとエバが歴史的実在だという観念は、バチカン第二公会議をきっかけに６０年代、カトリック知識人の間で否認されていった。Pierre Teilhard de Chardin, Karl Rahner や解放神学者の著作では、歴史的存在としてのアダム、エバは全く登場しない。リベラルなプロテスタント系キリスト教でも近代主義の台頭とともに歴史的アダムとエバは大概退けられてきた。

ところが近年、新たな事実の発見と共に、単源論が再び脚光を浴びている。代表的なのはレベッカ・カーンの研究で有名になった「ミトコンドリア・エバ」説だが、今のところ、決定的な発見とは言い難い。当然ながら人類共通の祖先だと断定すれば、一部のカトリックや、リベラルなプロテスタント知識人との対話が成り立たないだろう。本稿ではこのテーマに触れないが、私個人は、この説についての反対論に匹敵する弁護論が、十分に可能だと確信している。

懐疑派は聖書の創世記を「神話だ」と一蹴したがるかも知れないが、現代思想で人間のあり方を洞察する素材として神話を持ち出したのは統一思想が初めてではない。ノーベル賞作家カミュは、シジフォス神話にある深遠な意味と心理学上の含蓄について書いている。彼は小説「転落」の中で、普遍的な罪意識を実存的なテーマとして取り上げた。

マルクスの宗教批判は、プロメテウス神話から啓発を受けている。後にマルクス一流の「エデンの園と堕落」神話を、「原始共産社会」の概念で表現した。「資本論」では、私的所有の獲得を通じて原始共産社会が解体していく様を「原罪」だ、とまで形容した。

プラトンやトーマス・モア、ロバート・オーエンも、一種の理想的社会を標榜したが、そうした歴史的実例は見あたらないし、人々が全てを共有し合う原始的社会の痕跡を示す考古学上の証拠はない。むしろ私的所有は動物界にも広く見られる。

カール・ユング、ジョセフ・キャンプベルや彼らの弟子筋は、人間性や人間のあり方を考察するために、神話の方法論を検討することの大切さを教えてくれる。キャンプベルの「Myths to Live by」を評論したレオン・バルターは、「神話は人生の大事な要素で、人間性を投影し、かつ人間性を形成するものだ。神話は人間を、自分と外界に向き合わせてくれたり、それらに適応させてくれる。」（心理学季報７５年）

歴史的事実としての人間堕落やその結果について納得できなくても、創世記の物語や派生的な教訓に意味を感じることはできる。その一部が、中東の直面する問題に洞察や知恵を提供してくれるのだ。

統一思想の歴史法則は、真の平和と和解を実現する道筋に、重要なヒントを与えてくれる。文師側近の郭ジョンファン師は、「平和」が文師にとって「戦争のない状態」以上の格別な意味を持っていると指摘した。それはスピノザが、「平和は戦争のない状態のことではない、むしろ徳性や心の有り様であり、慈善の態度、自信や正義感なのだ」と喝破したのに響き合う。郭師は付け加えて、文師の「平和」は一時的なものではないと指摘するだろう。平和は存在が永続する状態を意味するのだ。人間は健康維持のために、生命を脅かす病気に時々見舞われる必要がないように、断続的に戦争がなければ平和を実現できないわけではない。

統一思想によれば、戦争は堕落して傷ついた人間精神がもたらしたものだ。宇宙的なエデンに戦争はないはずだし、天国でも戦争はないだろう。統一思想は、神と人間が中軸にある世界が原相に相似していけば、平和と幸福は自ずとついてくると論じている。

統一原理は、神を次のように叙述している。

「神は本性相と本形状の二性性相の中和的主体であると同時に、本性相的男性と本形状的女性との二性性相の中和的主体としておられ、被造世界に対しては、性相的な男性格主体としていまし給うという事実を知ることができる。」

統一思想によると、人間は個性を完成し、神を中心とした夫婦と家庭を築くことによって神に相似し、神の永遠で絶対的な愛のパートナーになる。しかし人間の堕落により、人類は絶対的な調和を達成する潜在能力を失ってしまった。つまり人間の心は体と調和できず、同じように夫と妻も調和できない。本来の調和の中で完全な神的出会いを経験し、その出会いの中から神の個性を見つけ、それが人間に投影されることで、各自の最も深い本来の価値を発見する。

しかし堕落による魂の荒廃で、人間はしばしば罪意識や絶望感に襲われる、深刻な疎外に陥った。その原因は聖パウロが新約聖書の「ローマ人への手紙」(7/22-24)で慨嘆したように、性相と形状（心と体）の合一が失われたことだ。その結果、夫と妻の不和、親と子、そして家族全体の不和をもたらした。

統一史観は創造本然の理想との関連で理解される必要がある。人類は神の原相に似るように成長するはずだった。創造主のごとく人間は中心存在として定着し、神の似姿としての素晴らしさを、神性を反映し安定した夫婦の愛情や、家庭、氏族、社会、国家、世界、宇宙の中に拡大するはずだった。統一思想によれば、そのような状態においてのみ、人間は神のパートナーとなり、神から受け継いだ伝統を他者、とりわけ自らの家族に伝えることによって、神の最奥の愛を体験するようになった。

統一思想の歴史法則と、イスラエル・パレスチナ危機の解決

統一史観は創造の七つの法則と、復帰の七つの法則から構成されている。ここでは全ての法則を説明しないが、文鮮明師が中東での平和と和解のために進めておられる内容を了解できるものに限って説明しておきたい。創造の七つの法則と、復帰の七つの法則は以下の通りだ。

創造の法則

①相対性の法則、②授受作用の法則、③相克の法則、④中心の主管の法則、⑤三段階完成の法則、⑥六数期間の法則、⑦責任分担の法則

復帰の法則

①蕩減の法則、②分立の法則、③四数復帰の法則、④条件的摂理の法則、⑤偽と真の先後の法則、
⑥縦の横的展開の法則、⑦同時性摂理の法則

現代の中東危機を理解するために以下の法則について検討してみよう。
縦の横的展開の法則、三段階完成の法則、中心の主管の法則、責任分担の法則、分立の法則、蕩減の法則、相対性の法則、授受作用の法則。

なお断っておくが、これらの法則は中東問題への統一思想のアプローチを理解する上で大切だが、最も柱になるのは蕩減の法則である。

縦の横的展開の法則

統一思想の歴史分析の中で、イスラエルとアラブ諸国の今日の闘争について具体的に触れている箇所がある。

「*例えば今日のイスラエルとアラブ諸国の対立は、たとえ今日の問題であるとしても、根源をたどってゆけば、旧約時代におけるイスラエル民族と周辺民族との闘いが、今日、再現された性格の闘いであることが分かる。従って今日のイスラエルとアラブの対立を単に政治的な問題として把握しただけでは解決は不可能である。すなわち歴史をさかのぼってその根本的な原因を見いだし、その原因を根本的に解決しなければ、イスラエルとアラブとの対立は終わらないのである。*

そのように終末の時が来れば、縦的な歴史上の様々な事件が再現され、様々な予想しない事態が続発するようになり、そのため世界は大混乱に陥るようになる。縦の横的展開の法則によって、終末において、そのように世界が混乱に陥るようになるので、聖書は、このような状況を「大きな艱難」と表現しながら、「その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな艱難が起こる」（マタイ２４．２１）というイエスのみ言葉を伝えている。このような混乱は、人類が再臨主を迎えて、その方の真のみ言葉と真の愛の教えに従うことによってのみ、根本的に解決されるようになるのである。

神がこのように歴史の諸事件を終末時に再現させて、それらが再臨主によって根本的に解決するように摂理をなさるのは、第一に、六千年の罪悪歴史において人間が過ちを犯さないで成し遂げてきたという勝利の条件を立てることによって、神と人類の心から、歴史上の数多くの悲惨なる事件の記憶を永遠に払拭されるためであり、第二に、サタンの讒訴条件を一層してサタンまでも永遠に救うためである。」

縦の横的展開の法則は、我々が過去を理解しないと前に進めないことを悟らせてくれる。蕩減の法則と中東危機との関わりを学ぶに応じて、過去の失敗や現状の問題を清算し解決するために何を正すべきかが了解できるだろう。

三段階完成の法則

統一思想は、三段階完成の法則を次のように説明している。

「創造原理によれば、全ての事物の成長や発展は、蘇生、長成、完成の三段階の過程を通じてなされる。例えば植物は、種から芽が出る段階、茎が伸び葉が茂る段階、花が咲き果実が実る段階を通じて完成する。この法則が歴史にも適用されて、三段階の過程を通じて再創造の摂理がなされた。すなわち、ある一つの摂理的な行事が失敗に終われば、同様な摂理が三次まで繰り返されて、三段階目には必ず完成するという法則である。」
「アダムが堕落することによって創造目的を実現することができなかったために、神は第二のアダムとしてイエスを送られた。しかし十字架刑によって、イエスも創造目的を完全には果たすことができなかったために、第三のアダムとして再臨主を降臨させられるのである。」

三段階完成の法則は中東という地域の意味と立場、特にイスラエルとパレスチナの歴史的な意味を理解する助けになる。統一思想では、神話のテーマである「エデンの園」が、繰り返し言及される。「エデンの園」は人類が和合と幸福の状態で生きられる場所だった。旧約聖書が触れている「カナンの地」や「イスラエル」もエデンの隠喩であって、「新しいエデン」の土台になるはずだった。

エデン自体は国でないが、「原理講論」（１９９６）の説明によれば、悪の側の最初の民族国家が出現する前に復帰の過程（信仰基台と実体基台、それにメシアを迎えるための基台）が成就されていれば、国家はそれ自体必要でなかった。

ところがアブラハムが神に捧げた最初の供え物（雌牛、子羊と山羊、鳩とキジバト）で失策を犯したため、アブラハムの子孫達は見知らぬ土地で四百年を過ごす羽目に陥った。アブラハムの時代やモーゼの時代にはエジプトが強大な王国を築いていた。こうして人類の運命の重大な部分が定まり、より一層複雑な復帰のプロセスが必要になった。つまり摂理を遂行するには中心人物、中心家庭、中心部族のみならず、神がメシアを安心して降臨させられる中心国家も不可欠になったのだ。

創世記は約束の地カナンを、「乳と蜜の流れる地」と形容している。また預言者イザヤは新天地をこう表現している。「おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、子牛、若じし、肥えたる家畜は共にいて、小さいわらべに導かれ・・・」（イザヤ 11/6）。既に示唆したように、「エデン」や「イスラエル」を、悪と暴虐の世の中から隔離された領域と見るべきではない。むしろ神の王国と平和世界の出発点を意味するのだ。そこでは他者のために生きる伝統が定着し、それが「エデン」から「イスラエル」へ、さらに全人類に広まっていくだろう。

神の王国を実現する三段階とは、第一アダムのエデンであり、「乳と蜜の流れる地」イスラエルであり、最後に主の来臨に際して天から降りてくる「新しいエルサレム」（黙示録２１／２）だ。

文師も、三段階の「イスラエル」を通じた国家的摂理の完成について触れている。同師は

「イスラエル」の三段階として、

① 元々のイスラエルの土地。
② 第二の霊的イスラエル。現時点では内的にキリスト教、外的にはアメリカ合衆国が該当する。
③ 第三イスラエルはコリアを意味する。

「原理講論」は、これら三者の関係を次のように説明している。

「イエスが韓国に再臨されるならば、韓国民族は第三イスラエル選民となるのである。旧約時代に、神のみ旨を信奉し、エジプトから迫害を受けてきた、アブラハムの血統的な子孫が第一イスラエルであり、第一イスラエル選民から異端者として追われながら、復活したイエスを信奉して、第二次の復帰摂理を継承してきたキリスト教信徒達が第二イスラエル選民であった。」

郭ジョンファン師は２００６年９月１３日のスピーチで、文師にとって三者は一つのものだ、と解説した。文師は韓国、米国、イスラエルが一体化すべき必要性を公の場でも語っており、その理由として、究極的な目標であるエデンの実現と、それを継承する土地や国家の環境が必要なためだと説明した。国家は神の摂理を実現または挫折させる度合いに応じて興亡盛衰する。

統一思想の観点から、韓国が１９４８年に独立した事実と、イスラエルが同じ年に建国したことは偶然の一致でない。米国とイスラエルと韓国は、神の王国の出発点として定められているのだ。既に指摘したように、米国、イスラエル、韓国は、自国の繁栄だけを追求するのではなく、模範的、先駆的な国として、全世界を繁栄と平和の道に導くべきだ。ワシントン・モニュメントで１９７６年に行った演説「神のみ旨と米国」の中で、文師はこの三カ国が、ユダヤ教（イスラエル）、キリスト教（米国）、統一主義（韓国）をそれぞれ代表する重要な位置にあると言及している。

「これら三つの宗教は、神の摂理の中では正に三人の兄弟だ。そうであれば、これらの宗教が足場をおいているイスラエルと米国と韓国も兄弟でなければならない。これらの国々が神側を代表した共通の運命を持っているので、サタンを代表する共産圏は、国連の場でこれらの国々を孤立させ破綻させようとするのだ。

従って、これらの兄弟国家は国連の本来の目的と機能を取り戻すために連帯して努力すべきだ。彼らは内的には世界の宗教の一致を目指し、外的には世界そのものの統一に向かって貢献しなければならない。」

中心の主管の法則と、責任分担の法則

統一思想はキリスト教が世界的な中心宗教だと認識している。従ってキリスト教人口の多

い国々は、文師の誕生をきっかけに中心的勢力となり、神の摂理を進めるキリスト教徒が果たす役割を助長すると見る。

文師の生誕の地コリアは、神の摂理の中心的役割を有している。またコリアと数世紀におよぶ反目の歴史にも関わらず共通の文化遺産を保持してきた日本は、文師の使命と神の摂理にとって、それぞれ父と母の立場だ。米国はキリスト教の世界的代表であり、米国とキリスト教は神の摂理に中心的な役割を果たす。中心的役割とは、キリスト教や米国が下す決定次第で、神の摂理を直接的に後押ししたり、逆に中心国家や中心宗教が過ちを犯せば、重大な被害をもたらす。中心的な国や宗教は、過去の世代が犯してきた過ちや間違った態度を改める責任がある。

分立の法則

中心人物や中心国家が使命を果たすには、苦難の路程を通過する覚悟が必要だ。米国でミッションを始めた頃に語ったスピーチで文師は、神が選んだ摂理的人物を召命するまでのプロセスを要約している。同師はまずアベルの役割を語っている。

「アベルはまず神の愛を受けなければならない。彼はサタンの主管圏から分立されなければならなかった。サタンからの分立を勝ち取った時に、神はアベルを愛することができたのだ。その位置を獲得したら傲慢にならず、アベルはカインのために死ぬ覚悟が必要だ。この三段階は大切な公式だ。第一に世界を救いたければサタンを打破できなければならず、次に神の愛を受けなければならない、そして最後は、神と失われた兄の心情を思いやり、神の悲しみと失われた兄の嘆きを解放するため、兄に代わって自らを喜んで犠牲にできなければならない。この条件の上でのみ、兄も弟も神の前に戻っていくことができるのだ。」

ノア、アブラハム、モーゼ、イエス、そして文師自身も、神の導きで人類を新たな段階に導くために、家庭環境から離れなければならなかった。第二次世界大戦後、米国とコリアの指導者は、自らを悪から分別し、祈りと内省の時を経なければならなかった。キリスト教世界全体も、そのような過程を経るべきだった。キリスト教指導者は、世界を悪から解放してくれた神に感謝の祈りを捧げ、内省や浄めの時を過ごして、さらに神の導きを求めるべきだった。

だが、そうはならなかった。その成り行きで、米国が中心になって創設した国際連合には「神」が存在する場がなかった。そして文師の洞察によれば、冷戦は１９４８年で終結できたのに、１９８８年まで四十年間も延長することになった。

冷戦が終結した後、文師は改めてキリスト教世界が一体となり、キリスト教と神の摂理の将来について反省すべきだと訴えた。しかも文師は自らを分立するために、南米に赴きパンタナールの荒野に住み、そこでプロテスタントとカトリックの合一・和解を祈り、汗を流すことになった。

具体的にはウルグアイを拠点にしてキリスト教指導者の会議を数百回も開いた。１９９４

年から２０００年まで、北米の牧師達と中・南米のカトリック指導者を一堂に集めた。文師の目的は、キリスト教徒を他宗教から隔離することではなく、まずキリスト教内部で和解を進めることだった。

キリスト教は幾多の分裂で多くの痛みを経てきた。主なものとして大分裂、十字軍戦争、宗教改革、反宗教改革、「ナントの勅令」の撤回、英国や中部ヨーロッパでの宗教戦争、さらにホロコーストや黒人奴隷、アパルトヘイトなど抑圧や深い恨みをもたらした事態をキリスト教界が黙認したことだ。この和解と清算を叩き台にして、キリスト教以外、なかんずくイスラム世界に折衝していくためのものだ。

蕩減の法則

統一思想は蕩減の法則を、次のように説明している。

「堕落とは、人間が本来の位置と状態を失ったことを言う。そして復帰とは、その失った本来の位置と状態を回復することである。しかるに本来の位置と状態を回復するためには、一定の条件を立てなければならない。復帰のためのその条件を蕩減条件という。

人間が立てなくてはならない蕩減条件とは、第一に信仰基台であり、第二に実体基台である。信仰基台を立てるとは、神が立てた指導者（中心人物）に出会い、その指導者を中心として一定の数理的蕩減期間を通じて、一定の条件物を立てることである。そして実体基台を立てるとは、神が立てられた指導者に罪ある人々が従順に従うことである。

しかしながら歴史を顧みるとき、罪悪社会の人々は神が立てた指導者に従順でなく、かえって彼らを迫害した。従って義人や聖賢達の歩む道は常に苦難の路程になったのである。しかし神は、このような義人たちの苦難を祭物的な蕩減条件と見なして、罪悪世界の人々を屈服せしめ、神の側に復帰してこられた。すなわち義人達の苦難を条件として、神は罪人たちを悔い改めさせたのである。これが蕩減の法則である。その典型的な例がイエスの十字架であった。イエスの十字架を信ずることによって、多くの罪悪世界の人々は自分たちの罪を自覚し、悔い改めたのである。」

蕩減は人々が神の摂理で失敗した時に必要になる。また不義や悪行が行われた際にも必要になる。蕩減は神の悲しみ、恨みや痛みを終息させると同時に、人類同胞の悲しみや痛みを終わらせるものだ。さらに重要なことは、それが神の摂理を前進させる土台になることだ。

蕩減条件が成立するためには、神の心情の対象となり、統一思想で対象意識と称される心を神の前に示し、その意識に基づいて行動する中心人物が必要だ。その中心人物は信仰基台を立てる責任があるとともに、実体基台を立てるためにカイン的な人物やグループと協力し、メシアを迎えるための基台を造成する。

何を蕩減しなければならないか。

第二次世界大戦中に東西ヨーロッパとアジア太平洋地域では、合計して数千万人の命が失われ、莫大な代価が支払われた。キリスト教国家である米、英、仏は終戦後、その信仰に則って神の声を求めるべき深刻な責任があった。統一原理では、その時こそメシアを迎える基台を樹立すべき時だったと説いている。キリスト教は戦争の終わりとともに、神中心の環境を建設することが願われていたのだ。そして甚大な人命を代価として得られた、尊いが脆弱な平和を守り前進させるべきだった。

文師は長年、平和を促進し世事万般に神が運行できるために、国連が中心的役割を演じるべきだったと訴えてきた。文師によれば、国連は政治・社会・経済的次元だけでなく、宗教的次元をも持つべきだった。国連は神が世界の平和を実現するための機関として機能すべきだったのだ。

また国連が政治的な討論の場として、また文化・宗教面での交流をも促す上で、米国が中核的な役割を有していた。国連は米大統領フランクリン・ルーズベルトの“子供”であり、国連と米国を表す英単語が酷似したのは偶然ではなかった。噂ではルーズベルト大統領の夢は国連の初代“大統領”になることだった。同氏の病が命を縮めなければ、それは実現していたかもしれない。

しかし第二次世界大戦後に登場した国連は、米国の建国文書や通貨、諸々の習慣に反映されている神中心の要素を受け継げなかった。米国とキリスト教会は分立の法則を遵守して、戦後の世俗的な状況から分別し、神の愛を感受しながら、失われた兄カインを愛で接し、宗教や精神的伝統に中核的価値を付与するような国連を創設できなかった。

それどころか国連創設時に、世界的レベルのカイン的人物だったスターリンは、無神論と全体主義を軍事力で強化していたが、米国は彼を手厚く迎えたのだった。国連の創設文書からは、「神」に関する言及が一掃され“浄化”され、世界平和を保持する世界組織に宗教の出る幕はなかった。そして、これが中東の出来事に早晩影を落とすことになった。

国連と中東

ユダヤ国家を求めるロビー活動が功を奏し、１９４７年１１月に国連はパレスチナに、ユダヤとアラブ（イスラエルとトランスヨルダン）の二国家創設を承認した。イスラエル支持者はこの決議を賞賛したが、トランスヨルダンの自称“市民”達には、同じような熱狂がなかった。パレスチナ民族のアイデンティティは認められず、今に至るまで深い恨みの種になっている。

二国家創設を支持した国連総会決議第１８１号（１９４７／１１／２）は、賛成が三十三カ国、反対十三カ国、棄権十カ国という結果だった。アラブ・イスラム諸国からは、ただの一カ国も同決議に賛成票を投じなかった。この決議でユダヤ国家として認知されたイスラエルは、１９４８年５月に建国された。しかしアラブ側のトランスヨルダンは建国されなかった。

ノア・サラメ博士（紛争解決と和解のセンター所長）によれば、この経緯で最も痛ましいのは、同決議がパレスチナ人民の存在を否認した事実だ。このためパレスチナ人は、米国と

国連の手で彼らの国が地上から抹消されたと感じた、と指摘している。
　現在の中東危機を招いた理由は色々だ。西欧列強の帝国主義、社会的不正義、歴史的な軋轢、宗教・思想上の葛藤等々だ。しかし統一思想の立場から見ると主要な理由は、国連が平和実現の方策を講ずるに当たって宗教指導者を関与させなかったところにある。そのため、パレスチナ社会やアラブ諸国が納得できる形のユダヤ民族郷土をもたらすために、祈りに導かれて力を尽くすと言うより、政治的な駆け引きに終始してしまったのだ。

　冷戦の最中、文師は両極化する世界を、「神に属するものと、神に属さないものとの闘い」と断じた。２００７年９月２３日、アベル国連としての天宙平和連合を創設する行事の際に文師がアドリブで語られた内容で、今日の状況を「神に属するものと、神に属さないものとの闘いの延長」だと規定した。
　有神論か無神論の議論は、かつてと比べれば切迫したものではない。マルクスは宗教を阿片だと表現し、レーニンは宗教を酒に例えた。スターリンやフルシチョフはロシア正教会の聖堂を倒壊させたり博物館にするキャンペーンを展開した。また毛沢東は１９６０年代の文化大革命で孔子の伝統と権威に挑んだ。共産主義に根ざした宗教排除のトーンはおとなしくなったが、宗教そのものは多くの社会で、そして国連の場で軽視されるばかりだ。
　宗教の場は人々の洗礼や婚礼、あるいは葬送のためと見なされている。教会やモスク、シナゴーグは、人々がドビッシーの曲を聴いて安らぎを得るのと似た、内面の平安を見つけるために時々訪れる施設になっている。現代の知的空間で、物事を見極める「正当な手法」として、宗教は二義的な立場に甘んじている。

公共の議論から宗教が排除された理屈は何か？

　宗教の預言者的役割を無力化する契機は、科学的発展に関して大半の宗教、殊にキリスト教が断片的で、知的に不満足な応答しかできなかったことだ。多分その最も重大なケースはダーウィンの進化論に関連するもので、キリスト教指導者は十分な知的基礎もないままに猛反発するのが落ちだった。
　実際、宗教界がダーウィンの進化論を憎悪しながら、それに反駁するには至って浅薄な科学的論拠しか示せなかったため、ジョン・デューイはキリスト教を「小道具」呼ばわりし、自らは人間主義の教育運動に肩入れして、遂にそれを米国の教育システムに組こませたのだ。
　スペンサー・トレイシー主演の映画「Inherit the Wind（１９６０）」は、ダーウィンの学説に反発するキリスト教徒の見方を、非寛容で未熟なものと描いた。偶然か否か、この映画が封切られて数年後に、米連邦最高裁判所は公立学校での祈りを禁じる主旨の判決を下した。
　文鮮明師は数十年来、国連の可能性と限界について言い続けてきた。国連は世俗的な支持基盤のせいで、物事の検討はもっぱら政治・経済・社会正義の観点から行われてきた。国連創設以来、世界の偉大な宗教から知恵を集めようといった関心は、全くといって良いほど示されなかった。
　１９９８年から文師が提言し続けているのは、国連に「平和理事会」の名前で超宗教理事

会を設置し、安保理事会と肩を並べる程度の決定権も有する機構にしようということだ。それは同師に言わせれば、「現在の国連代表部のように特定の利益を代弁するのではなく、超宗教的で普遍的な観点から、真に人類の福祉と平和のために働く」機関でなければならない。同師の提言を若干修正した形の提案が、目下、国連で検討されている。国連の第六十一回総会では、文師の勧告に由来する宗教理事会の提案が支持された。

国連が設立当初に宗教を無視したことが、イスラエル建国に当たって、あれほど稚拙な扱いしかできなかったことを説明して余りあるものだ。文師がよく語ったことだが、神はアフリカ人が米国に渡って来て、米国が真に世界を代表する国家になることを望んでいた。だがアフリカ人が実際にアメリカにやって来た方法は、神が望んだものではなかった。同様に文師が信ずるところでは、イスラエル建国は摂理的なものだが、その方法は神が望まれた形とは異なっていた。

国連の「二国家方式」で宗教が果たす役割

１９４７年当時に宗教指導者から構成された「平和理事会」があったと仮定して、中東にユダヤ民族国家を創設せよとの要請を、彼らは祈りの中で如何に見つめたか考え直してみよう。また統一思想が平和理事会に、どのような洞察と知恵を提供し得たか、今の時点で何を提供できるかを検討してみたい。

統一思想は異なる宗教をどう見るか？

統一思想は包括的な思想であり、主要な宗教のどれをも「悪だ」とか「サタン的だ」とは見ない。統一運動では、文鮮明師が人類救済に決定的な役割を果たすと主張しているが、それと同じように、歴史の中で神は様々な宗教や信仰を通じて摂理され、今でも信仰を持つものを通じて働き続けておられると見なす。その中には、アブラハムに由来するユダヤ教、キリスト教、イスラムの三大宗教が含まれる。

また統一思想では、アブラハムに縁のない信仰である儒教、道教、ヒンズー教、シーク教、バハイ教等を通しても神は働かれておられると認識している。さらに特定の信仰を持たないが良心的に生きる男女を通じても神の摂理は働かれると捉える。統一思想は国連の平和理事会が包括的アプローチを採り、偉大な宗教の全てが一堂に会することの大切さを認識している。統一思想は、それぞれの信仰にある独自の特長が相乗して、世界の諸問題を解決するのに寄与するとみる。

国連の平和理事会に参加する資格とは？

もし国連の平和理事会が１９４５年当時に設立されていれば、主要な宗教指導者を一堂に集めて、様々な課題に関して国連に洞察と知恵を提供していただろう。統一運動の観点では、これら指導者は出身国代表ではなく、自国の元首に任命される必要もなく、属する宗教の代

弁者でもない。彼らに期待される責務は、謙遜な心を保ち、互いの訴えに耳を傾け、祈りと瞑想、対話の中から造物主の声を聞きわけることだ。

統一思想が言うところの神に向かう対象意識を体得し、神の心情に孝行な存在になるよう務めることだ。そして祈りや瞑想、対話を通じて、平和理事会に参加している各宗教に投影された神の慈愛と冥利を感得するよう力を尽くすだろう。

国連の平和理事会におけるリーダーシップの条件は？

国連の平和理事会におけるリーダーシップは、参加する一人一人が代表する宗教・宗派に基づいて選出されるのではないが、理事会の審議の都合上、持ち回りの指導部が立てられることはあり得よう。しかし統一思想によれば、真のリーダーシップは、理事会メンバー各自の善の実績に基づいて認知されるようになろう。時間が経てば、平和理事会の中で他者のために生きようとする人、または神の前に孝行の義を表そうとする真の対象意識や、他者への奉仕の徳や英知、関心の高さを示す者を認め、そうした人を頼るようになるだろう。本物の指導者は、全ての宗教を正当に評価し、また言い争う当事者それぞれの心を理解できる者だろう。

統一思想は、平和理事会が如何にイスラエル・パレスチナ危機を処理すると説明するか？

当然ながら平和理事会に参加する各宗教の代表者は、それぞれの教理や霊的啓示に則って、イスラエル・パレスチナ問題に取り組もうとする。しかし統一思想はまず神の心情と、闘いの渦中に置かれた者達の心の痛みを理解しようとする。統一思想が原存在と規定する神は心情の神だ。その神は通常考えられているような全能の神ではない。統一思想の見る神は、自主自立の神というより、創造主でありつつ関係性を有する神であって、自己の完成には最初の子女達の完成あるいは霊的成熟を待たなければならないと定立した時から、神は全能性の一定の側面を犠牲にしたことになる。

文師もこの点を次のように強調されている。「「神様、貴方は全能者でないのですか」と尋ねたら、神は答えよう、「我は全能者だが、愛のためには全能でない」と。」文師はまた次のように指摘する。「堕落によって生じた神の痛みの根元を掘り下げて、神と人間の関係が如何なるもので、全知全能であるはずの神が、何故これほど無能な神になったかを理解しようと求めた者は誰もいなかった。」

同師はまた、神は人類を糾弾したり懲罰することに何の喜びもないと説く。

「今日キリスト教は、神は聖なり、全知全能なり、御座にいます審判主、万民を裁く正義の主、と宣言している。あなた方は裁判官が好きですか。もし裁判官が十年間奉職すれば病に倒れるだろう。病気にならないとすれば、その裁判官は偽者だ。裁判官はしばしば死刑判決を下さざるを得ないが、その判決は誤りかもしれない。ある事態の見方は様々であるにも関

わらず、判決が人を生かしも殺しもする。深刻な話だ。人間的観点から判断すれば、物事の真実を見間違うことも少なくない。だから正義感の強い人は裁判官を十年もやれば、病気になってしまうというのだ。」

統一思想によれば、神が欲するのは愛することであって裁くことではない。神と人類は、人間堕落の瞬間から極めて異なった軌道を歩むようになった。人間の性質は六つの面で歪められ、深刻な人間疎外の状況を生んだ。

① 人類は性相と形状の調和を達成できなくなった。
② 性相と形状の合一が失われて、男性と女性も互いの間の真の関係を持てなくなった。
③ 人類は個人としても夫婦としても完成されなかったので、人類は神から各自に伝えられた、罪のない個体のイメージを映し出すことができなくなった。
④ 人類は神の心情に対する感受性を喪失した。
⑤ 人類はロゴスまたは神に由来する伝統を見失った。
⑥ 人類は真の絶対的な創造力を保有できなくなった。

統一思想によれば、世界の諸問題は人類が原存在に相似して初めて解決される。堕落以来、人類が神に相似できなくなり、神も完全な相対関係を結ぶ対象を失った。こうした悲劇的な状況にも関わらず、傑出した人々が神の心情を深く洞察できた。

例えばマルチンルーサー・キング牧師が中傷者の反発に如何に応じたか。同師は言った、「非暴力とは外的に物理的暴力だけでなく、霊的な内的暴力を避けることだ。人に銃弾を向けないだけでなく、人に憎悪を向けないことだ。」

統一思想が教えるのは、そうしたものの見方を強めるには、深い祈りの中で他者を神の子と感じるようになることだ。祈りの心を持つ者が、そうした境地に到達しやすいものだ。統一思想は平和理事会のメンバーが相対している一人一人が、公儀の道を歩もうと尽力した先祖達の末裔だ、と悟れる心の持ち方を備えさせてくれる。

神が我々の両親はもとより祖父母、曾祖父母、さらには我々の父祖を知っておられる神ならば、我々一人一人を如何なる思いで見つめられるだろうか。愛の親である神が我々を見つめられる際、祖先の各人がなした功労にも思いを馳せたいに違いない。統一思想が見る平和理事会は、正にそうした心情を受け継ぐことが期待されるだろう。

他者の心の琴線に触れて、行き詰まりを打開する力を生み出すのは、本物の宗教指導者の誠実な愛と涙に満ちた心情だ。統一思想が言う対象意識は、神に向かう如何なる道を歩む者にも謝恩の気持ちをかき立て、一番大切なことは、神に至る各自の道を見いだして、神のごとき存在になることだと銘記させてくれる。ある特定の道そのものが大切なのではない。崇高な魂を持つ男女を育んできた宗教は、どれであっても造物主に通じる道として尊重されるべきだ。

統一思想によれば、国連の平和理事会は各宗教への敬意を持つことを奨励するが、それは教理・教条の卓越に向けられるより、神に至ろうとした創始者や聖人達の真摯な思いに向け

られる。統一思想が重視している対象意識は、平和理事会のメンバー達の心に、神と人間の尊厳を取り戻そうと尽力した全ての人々に感謝の念を抱かせるだろう。この対象意識は、特定の政治状況についての見方まで示唆してくれるだろう。

平和理事会がイスラエル・パレスチナ問題を如何に扱うべきか。平和理事会がユダヤ・アラブ双方を深い情愛で思いやり、彼らの和解を切望するようになるような、神の記憶に刻まれた格別な事柄を振り返ってみたい。

神は何故、イスラムを愛さざるを得ないのか。

アブラハムの家族について学ぶ場合、考えるべき不幸な事情が創世記に記されている。アブラハムの妻サラは不妊だったので、女奴隷のハガルをアブラハムに与えた。ハガルはアブラハムの長男を産み、その子はイシマエルと名付けられた。ところが神はサラにも、いずれ子が授かると約束され、実際にイシマエル誕生から聖書の記述によれば約十三年後に息子イサクを産んだ。

イシマエルが生まれた時にサラはハガルを嫉んだ、と創世記は記録している。そしてイサクが生まれた時、サラはアブラハムに願い出て、ハガルとイシマエルを追い出そうとした。創世記によれば、アブラハムはサラが食い下がるのを不愉快に思ったが、神はアブラハムに、サラの要求に応じるよう諭した。その際に神はアブラハムを慰め、イシマエルの血筋から偉大な民が現れると予言された。

親から捨てられたイシマエルは葛藤したはずだが、父アブラハムや弟イサクと絶縁したわけではなかった。創世記によればイシマエルは父の葬儀に参列し、自分の娘バスマテをイサクの息子エソウに嫁がせている（創 36/3）。神はイシマエルが父親に変わらぬ忠義を尽くし、親のお気に入りの弟イサクを慈しむ姿を見て感心したに違いない。イシマエルこそは恨みの感情を乗り越えた人物として賞賛されるべきだ。

しかし悲痛な別離の体験がイシマエルとその末裔に、如何なる影響をもたらしただろうか。著作家で宗教学者のカレン・アームストロング女史は「神の歴史」の中で、イスラムの開祖モハメッドが登場するまで、アラビアは劣等感、つまり神は啓示による恩寵をアラブの民に与えてくれない、という愛の減少感に苛まされた、と解釈している。

「従って（アラビアには）劣等意識が広く漂っていた。アラブ人が接触するユダヤ人やキリスト教徒は、アラブ民族に神が何のお告げも与えていないとあげつらっては冷やかした。アラブの人々は、自分達にはない知識を保有する人々に、不満と尊敬の入り交じった感情を抱いた。アラブの民はユダヤ教やキリスト教が、自分達の伝統的な信仰より優れていることを感じていたが、それらの信仰はアラビアにあまり普及しなかった。」

統一思想によると、イシマエルやエソウはカイン型の人物という立場で、弟を通じて神の祝福に預かるようになっていた。統一原理によれば、その祝福はエソウとヤコブが和解した時に初めて成就した。この蕩減の路程はイシマエル・イサクの世代から、エソウ・ヤコブの

代に延期されていたが、その原因はイシマエルにあったのでなく、サラがアブラハムに要求してハガルとイシマエルを追放したところにあった。このため統一思想の観点では、サラの霊的末裔と言うべきユダヤ民族やキリスト教徒の側から、何らかの償いが必要なのだ。

ハガルは素晴らしい伴侶であり立派な母親だったに違いない。アブラハムの家を追われた後、彼女はイシマエルの実の父親と弟を憎まざるを得ない立場にあった。イシマエルがイサクや、イサクの息子達を慈しむ思いを抱き続けられたのは、ハガルがイシマエルに、家を追われても父アブラハムを敬愛するよう教育したからだろう。もしアラブ民族やイスラムの祖先であるハガルやイシマエルに寄せる神の記憶がそうならば、平和理事会のメンバー達が中東の将来について思案する際、脳裏に刻んでおくべき歴史のエピソードだろう。

文師の米国での歩みは決して平坦なものではなかった。それでもアメリカを断念できなかった理由について同師は、アメリカ建国の先駆者達、いわゆる「ピリグリム・フォーザーズ」が神に仕えようとして大西洋を渡りながら、最初の越冬で多数が死んでいった事実を忘れられなかったと語っている。ハガルやイシマエルの歴史も、そのようなものとして神の心に残っているのではないか。

イスラムとその発展に関して評価すべき内容は他にも多くある。イスラムのおかげで、それまで社会秩序が乱れ、部族争いが深刻だったアラビアに、一神教が定着した。またイスラム文明によって、西欧文明は「中世暗黒時代」に保護された。アリストテレスの著作物が後世に遺されたのは、イスラムの偉大な学問的伝統と、アベロエスやイブン・シーナなど知識人の業績に負うところが大きい。

イスラムはユダヤ・キリスト教の宗教的伝統を引き継いだと自認する、いわばユダヤ教、キリスト教の兄弟宗教だ。そのためイスラムは信仰者を強制的に改宗しない。神の心にはキリスト教やユダヤ教と並んで、イスラムの伝統を受け入れる広さがあると信じるからだ。

イスラムでは、神が帯びている九十九の名前の中で、最も重要なのが仁慈（慈しむ心）だと信じている。従ってムスリムは憐れみ深いことを求められているが、ムスリムと一緒に仕事をしてみれば、多くの場面でそうした特長を目の当たりにする。イスラムは愛と慈しみの雅量を鼓舞するが、それを証しするような実話で有名なのが、米国の黒人イスラム指導者マルコム・Ｘと白人ムスリムがサウジアラビアのメッカで出会った時の出来事で、前者が白人一般への態度を変えるようになったという。平和理事会の場でイスラム指導者は、平和の促進に力強い役割を演じることができるだろう。

西側社会とイスラム・・・統一運動の見方

西側社会、とりわけ二十世紀と二十一世紀の西側では、アラブ世界にきめの細かい配慮を欠いていたようだ。それは第二次世界大戦後の中東にイスラエルが建国された過程に顕著だ。大戦中の戦慄すべき事態を受けて、ユダヤ国家の必要は明らかだったが、西欧列強はイスラエル国家創設に忙しくて、新興アラブ諸国の意思やアドバイスを十分に受けたとは言い難い。

むしろ１９４７年に起きたことは、ちょうどアブラハムが犯した失敗のように、国連はサラの子孫達（ユダヤ・キリスト教）を選び、ハガルの末裔（アラブ・イスラム）に耳を傾け

なかった。
英国の歴史家ポール・ジョンソンは「現代という時代」（１９８３）の中で、イスラエルの建国は概ね、大国、中でも米国の創作によるものだ、と書いている。（大英帝国の意義も重視しているが・・。）

「熱心なシオニストの大統領補佐官デビット・ナイルは次のように証言した。「もしルーズベルトが存命中だったら、イスラエルが誕生できたか非常に怪しい。トルーマン（米国大統領）は政治的にずっと弱体で、１９４８年の選挙に勝つにはユダヤ票が不可欠だと判断していた。同時にトルーマンは本気でシオニズムに賛同していて、国務省の外交官に広まっていたアラブ寄りの考え方に首を傾げていた。実際、国連でパレスチナ分割案を押し通し（１９４７．１１．２９）、翌年５月にベングリオン（イスラエル初代大統領）が建国宣言した直後に、米国がイスラエル国家を承認したのはトルーマンの意思によるものだった。」

ジョンソンはイスラエル建国が、どれほどおおっぴらに政治的なものであったかについて記している。彼によれば、１９４７年当時のソ連もイスラエルの建国を、中東での英国の影響力を分断し弱める上で好都合だとみていた。国連平和理事会は、政治的な便宜に基づくのではなく、心情次元に根ざした解決を図ることができたであろう。
イスラエル建国について、国連平和理事会と国連が適切な観点を持つために、統一思想がどのように貢献できたか。
文師は米国の奴隷制について語ったことがある。同師によればアフリカ人がアメリカに来ることは、米国が世界中の全ての民族を代表する国になるため大切なことだ。しかし神の摂理的計画からみて奴隷制度は、アフリカ人を米国に連れてくる手段ではなかった。
同様に、過去の忌まわしい歴史を洗い流し、許し忘れるためにはイスラエル建国が必要だった。しかし神の願いは、中東の全ての国々が賛同し、キリスト教世界が全面的に支援する形でイスラエルを再建することだった。残念ながら現代のイスラエルは、そうした形で登場できず、もっぱら政治的な都合によるものだったから、はっきり勝者と敗者が出てしまった。これも国連が神の心情に思いを致すことができなかったための失敗だ。
今日、世界人口の約三分の二が、アブラハムに由来する三大宗教、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラムのいずれかに属している。歴史を分析し、特に統一思想の光でみてみれば、神との共感や同情を背景に、イスラエル誕生に至る多大な人間的犠牲に彩られた、実に痛ましい路程が浮き彫りになる。
ユダヤ教の原点にはアブラハムという、神が滅ぼす決意をした異邦のソドムとゴモラの人々の助命を神に嘆願した人がいた。イサクは父アブラハムを深く信頼し、その父の手にかかって死ぬ覚悟をした。またヤコブは、かつて自分を殺そうと血道を上げた兄エソウと和解するため、生命がけの努力をした。そしてヤコブがハランの土地で二十一年間の亡命生活を終えて帰郷した際、エソウはヤコブを歓迎し、ヤコブは兄のために用意した多くの贈り物を受け取ってくれるよう懇願したのだ。

「ヤコブは言った、「いいえ、もしわたしがあなたの前に恵みを得るなら、どうか、わたしの手から贈り物を受けてください。あなたが喜んでわたしを迎えてくださるので、あなたの顔を見て、神の顔を見るように思います。」

ユダヤ教の歴史の中には、未亡人となったタマルのような人も登場する。彼女はユダの血筋を残すために義父を誘惑するという命がけの挙に出た。その関係からペレスが生まれ、ペレスの血統からイエスが出てくるのだ。

ユダヤ民族の歴史には次のような段階を見ることができる。

① エジプトでの奴隷時代
② イスラエル十二部族のうち、十部族が捕虜となり滅亡する
③ バビロン捕囚
④ ユダヤ民族がローマ帝国に抹殺される(AD70)
⑤ ローマの滅亡後、第二次ディアスポラが始まる
⑥ 欧州でユダヤ人が「キリスト殺しの民」として、キリスト教徒から断罪・迫害される
⑦ 十字軍戦争の最中に、ユダヤ人も犠牲になる
⑧ 異端審問
⑨ 東欧でのユダヤ民族に対するポグロムが展開する
⑩ ホロコースト

イエス自身はユダヤ民族の出身であり、イスラエル同胞への情愛があふれていたので、エルサレムを眺めながら激しく泣いたと聖書に記されている。

「ああ、エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、おまえにつかわされた人々を石で打ち殺す者よ。ちょうどめんどりが翼の下にひなを集めるように、わたしはおまえの子らを幾たび集めようとしたことであろう。それだのに、おまえたちは応じようとしなかった。」（ルカ 13:34）

もし平和理事会を構成するキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラムの指導者が、イスラエルを思うイエスの心や、アブラハムのイスラエルに対する愛着の気持ちを受け継いでいれば、ユダヤ民族郷土の建国を信仰を持つ者全て、なかんずくユダヤ教、キリスト教、イスラムの誇りの源と感じて実現していたのではなかろうか。

統一思想は、ユダヤ民族がイエスを「メシア」と受け入れ、最も身近な立場で従っていくように選ばれていたと見る。残念ながら二千年前にそれは実現しなかったが、その原因には、洗礼ヨハネがイエスの真価を了解しながら、弟子として仕えようとしなかった失敗もある。

こうした失敗の歴史を償うため、２００３年１２月、文師はエルサレムでイエスを「王の王」として戴冠させる特別の式典を挙行した。その式典にはキリスト教徒、ユダヤ教、ドル

ーズ教、ムスリムなどが一堂に集まった。イスラエルの国が存在しなければ、このような行事は実現できなかっただろう。ユダヤ民族とイエスは文師に導かれて和解しなければならず、イエスが巡り教えを説き、生命を捧げたイスラエルこそは、その主舞台になるのだ。

統一思想と中東問題の実際的な処方箋

統一思想の歴史論によれば、全ての物事は一定の過程、つまり三段階の発展過程を通じて実現していく。従って１９４７―４８年当時に二国家方式を平和裏に実現するには、超宗教的な協力と対話の環境を醸成する段階的な過程が必要だったはずだ。

① 宗教を軸にした国連平和理事会の創設

平和の推進には、これが最も大事な貢献をするだろう。既述のように第二次世界大戦の直後、ユダヤ国家創設の議論が国連に持ち込まれる前に、平和理事会が設置されているべきだった。既にその意義と運営について詳述したので繰り返さないが、イスラエル建国のプロセスは、平和理事会の祈りに満ちた教導を受けて進められるべきだった、とだけ述べておきたい。

② 国連監視下で、平和理事会に裏書きされた「平和地帯」を、イスラエルの聖域に設ける

イスラエルの聖域は主要宗教の全てにとって大事な場所だ。伝承から著名なところでは、アブラハムがイサクを奉献しようとした場所、神の指示に沿って神殿を建設した場所、イエスが十字架に釘けられた場所、モハメッドが昇天した場所等だ。これらの場所は三大宗教の全てに意義深いため、それらを巡って数多くの係争が起きた。中でも七次の十字軍戦争は、欧州全土と聖地に甚大な災禍をもたらした。

２０００年８月１８日に国連の中で演説した文師は、係争の焦点となっている地域に平和地帯の創設を提唱したが、エルサレムは正に最も熾烈な奪い合いの街の一つだ。

「今日私は、国連と宗教指導者が連携して、紛争地域に平和地帯を設けるよう提案したい。係争中の国境が山や川または平野や海を通過していても、その国境に沿った緩衝地帯または平和地帯を創設できる。

これらの地帯は国連が直接管轄し、平和の創建に献身したい人々がこの地帯に定着できる。国連はこの地帯に居住する者が国連創設の理想を体現し、その平和の原則を遵守するよう指針を与える責任がある。こうした平和地帯は、平和と繁栄と和解のための安息圏になるだろう。」

ここで示された指針は、１９４７．１１．２の国連決議で確認された元々の指針と軌を一にするものだ。同決議は次のように規定している。*「エルサレム市は別途の国際協定で統治される分離地域として、国連が管轄する。信託統治理事会は国連の意向を受け、行政当局とし*

ての責任を担う。」この取り決めは最低十年間有効のはずだった。ところがイスラエル建国直後にアラブ勢力が攻撃したため、イスラエル指導者は国連決議のこの部分は無効・失効したものと見なしている。１９６７年の六日戦争の後、イスラエルがエルサレム全地域を主張する要求は一層強まった。

分割提案について依然論議は絶えない。しかしイスラエルのエフド・バラク首相とパレスチナ指導者ヤセル・アラファト議長が行った和平交渉の過程で、バラク首相はエルサレムの主権をパレスチナ側と分かち合う妥協案を受け入れる姿勢を示した。

その場合にエルサレムは当初の計画にあったように、また文師が提言したように、少なくとも一定の期間、国連監督下に置かれるが、その間、対話と平和を増進することになろう。三宗教の間の交流・対話が、超宗教的な対話や協力を啓発するようなテーマの会議として推進されるだろう。あるいは信仰を持つ者全ての長老としてのアブラハムを奉ずる毎年恒例の合同儀式のようなものを介して、相対性と授受作用の法則が機能し、イスラエルをめぐる主要な宗教間の交流と信頼醸成が可能だろう。

③ 相対性の法則と授受作用の法則が、ムスリム、キリスト教、ユダヤ教の絆を深める環境を助長する

平和促進のために、相対性の法則が授受作用の法則との関連で有益になることがある。文師が既に推進してきた活動を列挙する前に、この二つの法則と、それらの関係をもう少し説明しよう。

「事物の内部において、主体と対象の二つの要素が相対関係を結ぶとき、一定の要素または力を授け受けする作用が起きる。主体と対象間のこのような相互作用を授受作用という。この授受作用が行われるところで発展がなされる。歴史の発展もこのような授受作用によってなされてきた。従って歴史においても、あらゆる社会の分野で主体と対象の相対的要素（相対物）が相対関係を結んだのちに、共通目的を中心として円満な授受作用を行うときに、各分野での発展がなされたのである。

例えば国家が存在し繁栄するためには、政府と国民が国家の繁栄を目的として、主体と対象の関係を結んで円満な授受作用を行わなくてはならない。また企業の繁栄のためには、資本家、経営者、労働者、技術者、機械などが相互に主体と対象の関係をなして、円満な授受作用を行わなくてはならない。従って「相対性の法則」と「授受作用の法則」は表裏一体の関係にあるのであり、この二つの法則を合わせて広義の「授受作用の法則」とも言う。」

授受作用は相対基準が確立された土台の上でなされる。その根本的なダイナミズムは出発点と、一層深い共通目的を発見するプロセスにある。相対基準は授受作用の土台だが、それを発見する過程は、見知らぬ人々の間にいる際に体験することだ。

朝食会議の席で一緒になった人と、何か分かち合える事項はないかと探すだろう。もしかして同じ大学で学んでいたとか郷里が同じだとか、ひょっとすると子供時分に共通の友達がいるかもしれない、共通の趣味や同じ研究テーマを持っていれば、それだけで既に会話を深

めて広く考えを分かち合う土台ができたようなものだ。

文師は中東での平和努力を支援する様々なプロジェクトに着手してきた。それらのプロジェクトは具体的な成果を生んでいるだけでなく、中東の多様な当事者達が相対できる土台を準備し、授受作用を体験できる空間を提供している。以下に列挙するのは、文師が中東で定着させた活動の一部だ。

(a) 宗教青年奉仕プログラム

異なる宗教的背景の若者達を集め、一緒に奉仕作業を行ったり、各自の宗教的慣習や伝統を分かち合いながら友情の土台を造るプロジェクトだ。作業には学校や孤児院建設、農業地域に灌漑施設を設置するものなどがある。

(b) 平和奉仕プログラム(SFP)

紛争や緊張が存在する現地で仕事をするが、SFP は異なる人種、宗教、社会的階層の人々が一緒に従事できるよう奨励している。共に作業をすることで色々な心の壁が取り除かれることがＳＦＰの狙いだ。イスラエル・パレスチナで葛藤している人々を結びつけるための啓蒙プログラムを構築したり、コンピュータ学習センターの建設など、全当事者に有益な作業達成のため、互いの連携や協力を奨励している。また SFP は国連ミレニアム開発目標(MDF)を達成するための支援に格別の関心を持っている。

(c) プレイサッカー・メークピース

イスラエルとアラブの若者ら、異なる宗教・人種のチーム対抗のサッカー試合を支援するため、文師は二年連続、中東でのプログラムに百万ドルを提供してきた。スポーツの友好的な雰囲気の中でなら、様々な背景の若者達が互いを知り合い、生涯の絆を結ぶ機会を持てる、との信念に基づいて運営されている。

(d) 世界文化体育大典(WCSF)

文師は毎年 WCSF を主宰し、若者達が超宗教的なスポーツの祭典で競い合えるようにしている。この大典は既に十二年以上も継続され、数千人の若者達が参加している。こうして次世代の宗教指導者の対話と授受作用の触媒になっている。この行事は常に結婚祝福の式典で頂点を迎えるが、それには宗教の如何を問わず参加できる。

(e) 中東平和イニシアチブ

２００３年以降、文師は宗教指導者に平和のための中東訪問を勧めてきた。このイニシアチブには今までに約百四十七カ国から一万人以上の平和大使達が参加した。現地の反応も好意的で、例えば、ベツレヘム高校のナイラ・ハルーブ校長は、「絶望を見続けてきた心に希望を満たしてくれた」と述べた。ハイファ市のヨナ・ヤホブ市長は、「これは聖なる業だ。難しい時局に当地を訪れてくれて、私達に大きな希望をくれた」と語っている。

(f) 科学の統一に関する国際会議

この会議は現在、前述 WCSF の中に組み込まれている。同会議は科学者達が関心のある科学上の進展に関して交流し、科学の進歩と倫理・社会的な関連について討議するのに絶好の場を提供してきた。こうした科学者の交流は、互いの信頼醸成や、アイデアと経験を交換しあい、授受作用を深めるのに寄与してきた。

(g) 世界経典

文師が「世界経典」編纂を応援した狙いは、偉大な宗教の教えが共通の価値や理想を反映したり、それらを尊重していることを示すためだ。１９９１年の初版は、９２８ページからなり、様々な徳目について主要宗教の経典から引用し解説されている。

(h) 祝福式典

文鮮明師は結婚祝福こそ、長い間葛藤してきた人種、民族、宗教間の和解をもたらす中核的な手段だと力説してこられた。この祝福式典には、どんな信仰の持ち主でも参列できるが、祝福の根本的な目標、つまり神および人類同胞との和解であり、永遠の愛の誓いであり、家庭に真の愛の文化を築くことを確認する必要はある。

文師の努力の全ては、異なる背景を持つ人々が交流し、共通の価値を見いだし、互いに協力できることを学べる場を創り出すところにある。

ブリッジポート大学で最近行われたイベントで、ガンジー国際平和賞の受賞者 A.T.アリヤラット博士は、自らスリランカで続けてきた道路建設プロジェクトに触れながら、こう感想を述べた。「我々は道路を造るが、道路は我々を造ってくれた。」ここで述べた全てのプロジェクトはもちろん、触れられなかった数多くのプロジェクトも、具体的課題を扱うと同時に、結局「我々を造ってくれる」場を創り出しているのだ。

④ 霊的成長についての理解と、霊界への準備

過去十年の間に、自爆攻撃が中東紛争の戦術になってきた。人々は自爆攻撃の代償として与えられる恵み多い永遠の命を期待し、そのような攻撃に自分の生命を与える。統一思想は、心情を豊かにすることが霊的成長に寄与することを明らかにしている。

統一思想は肉体を持った人生を、平和で愛情豊かな心情を発達させるために用いることの大切さを強調する。これは特に家庭環境の中で積極的に奉仕をし、他者のために生きることで成し遂げられる。こうした実践により、我々の霊人体を成長させる生力要素が作られるのだ。

無差別の自爆や、無辜の人々を攻撃するテロは、イスラムやキリスト教、儒教、仏教その他全ての偉大な宗教が説諭してきた慈悲、愛、人の情けや憐れみとは全く矛盾したものだ。統一思想の本性論は、神に相似していくことの大切さを強調している。すなわち神の心情と願いとに向かう対象意識を軸としながら、心と体の統一、夫と妻の一体化、親と子の一致をすることだ。それは他者に怒りに燃えた攻撃をしたり、それも多くの場合に全く罪もない人々を標的とするような行為によって達成される類のものではない。

これに一点の疑念でもあれば、文師は平和理事会の宗教指導者達が祈祷や断食を通じて、無差別の標的を自爆攻撃をした人々が、恵み多き天国にいるのか、霊界で恥ずかしさと惨めさを味わっているのか、自ら判断してみるよう勧告している。

統一思想によれば、人間は四大心情圏を達成することで、神に似た存在になると強調する。四大心情圏とは、両親にたっぷり愛された子供の心情、血のつながった兄弟姉妹の情愛を経験した兄弟の心情、伴侶との永続性ある愛情関係、そして最後に自らの子供を愛してみて神

が自分を如何に愛しているか理解した親の心情、という四種類だ。神に似ていくプロセスは「愛の学校」としての家庭を基礎にしているのであって、暴力的な行動を通じてではではない。

結語に代えて

本論では基本的な考え方について紹介したが、願わくは本稿を通じて中東問題の複雑さを示唆できればと思う。同様に統一思想の歴史論と、霊界についての知見が、この紛争解決の糸口を洞察できる一助になればと願う。天宙平和連合の活動や、究極的には国連平和理事会の尽力が、現代の中東の直面する問題に永続的な解決を見つけると確信してやまない。（終わり）